

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370437

研究課題名(和文) 意味排除主義に基づく固有名と単称性に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Proper Names and Singularity Based on Meaning Eliminativism

研究代表者

酒井 智宏 (Sakai, Tomohiro)

早稲田大学・文学大学院・准教授

研究者番号：00396839

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：固有名詞に関する一見相反する解釈(1-2)を統合する固有名論を構築した。(1) 固有名とは個体という抽象度のもっとも低い単純な存在物につけられた名前である。それゆえ、固有名がもつ単称性は低次概念である。(2) 0歳の人物Aと80歳の人物A、あるいはスーパーマンとクラーク・ケントを同一人物と認識し、単一の固有名で指すのは人間だけである。それゆえ、固有名がもつ単称性は高次概念である。通常、個体はその属性によって認識される一方で、「スーパーマン = クラーク・ケント」のような同一性言明を理解するためには、矛盾する属性の背後にある個体を想定する必要がある。これが個体概念の二重性の源泉にほかならない。

研究成果の概要(英文)：I constructed a theory on proper names which is compatible with (1) as well as (2). (1) Proper names are given to individuals, i.e. the least abstract entities in the world. Accordingly, the singularity as represented by proper names constitutes a lower-level concept. (2) Only human beings can recognize Superman and Clark Kent as one and the same individual, despite their drastically different properties. Accordingly, the singularity as represented by proper names constitute a higher-level concept. In most cases, individuals are recognized through their properties. In understanding identity statements such as "Superman = Clark Kent", however, we must posit an individual which is defined independently from the properties exhibited by its aspects. This is the source of the ambivalent characterizations of individuals.

研究分野：言語学

キーワード：固有名詞 単称性 非存在言明 単文のパズル 同一性言明 捉え方 個体 個体の局面

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

- (1) 固有名の意味に関するもっとも素朴な考え方は、それが対象ないし個体の名前であるとする J.S.ミルの考え方(単称主義)である。この考え方によると、(a) や(b)のような文は、特定の個体に関する命題、すなわち単称命題を表すことになる。

(a) ロマン・ガリーは 1956 年にゴンクール賞を受賞した。

(b) エミール・アジャールは 1975 年にゴンクール賞を受賞した。

こうした単称主義は(c-d)のような文を前にしてパズルを引き起こす(フレーゲのパズル)。

・  
・  
(c) ロマン・ガリーとエミール・アジャールは同一人物だ。

(d) エミール・アジャールとエミール・アジャールは同一人物だ。

「ロマン・ガリー」と「エミール・アジャール」が同一人物 a を意味するならば、(c-d)はいずれも  $a = a$  というア priori に真である命題を表すはずであるが、実際には、(c)は(d)と違って一定の認識価値(情報価値)をもっている。そこで、ラッセルは、固有名を記述に解体し、一見したところ単称命題のように見える(c)が、実は(e)のような一般命題を表すと考えた。

(e) 1956 年にゴンクール賞を受賞し、かつ 1975 年にゴンクール賞を受賞した者が存在する。

しかし、こうした記述主義は数々の困難にぶつかることが知られている。

- (2) 哲学者・言語学者は、トートロジーを「X が X であるという当たり前の事実を述べる文」とみなしてきた。これに対して、本研究代表者は、実情はこれと逆であり、トートロジーが、人間の動機自由に基づいて生まれる言語記号 X の恣意性を前提として成立する現象であることを本研究開始以前に論証していた。ここから「語 X の意味は、X が使用されるかぎりけっして確定せず、言語使用者の関心のあり方に依じてさまざまに定義されていく」という意味排除主義のテーゼが導き出される。これによると、「打てなくなってもイ

チローはイチローだ」や「こんなに打たないイチローはイチローではない」は、「イチロー」の意味が未定であることを利用して、自分なりの関心のもとに「イチロー」の意味を定めようとする発話である。この結論は、(1)の単称主義(「イチロー」の意味 = 特定の個体)と両立しないように思われる。そこで、意味排除主義と単称主義をいかに折り合わせるかが問題となる。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、固有名(詞)が表すとされる単称性(個体性)概念の内実を言語学と哲学の両面から精査することにより、次の一見相反する見解(1)(2)を統合した固有名論を構築することである。

- (1) 固有名とは、個体という抽象度のもっとも低い単純な存在物につけられた名前である。それゆえ、固有名がもつ単称性は低次概念である。
- (2) 0 歳のときの人物 A と 80 歳のときの人物 A、あるいはスーパーマンとクラーク・ケントを同一人物と認識し、それらを単一の固有名で指すのは人間だけである。それゆえ、固有名がもつ単称性は高次概念である。

### 3. 研究の方法

- (1) 自然言語に見られる意味の柔軟性ないし文脈依存性が意味の合成性に対する脅威とならないことを確認する。
- (2) 外的世界を言語が解釈するという二元論的図式ではなく、言語が端的に世界の相貌を立ち現すという一元論的図式の妥当性を確認する。
- (3) 記述主義にとって有利に働くことされる非存在を表す文(「ベガサスは存在しない」)を、記述主義に陥ることなく、単称主義の枠組みで解釈することにより、単称主義が基本的に正しい立場であることを示す。
- (4) 固有名が究極的には単称性を志向するものでありながら、言語使用者の関心に依じていかなる対象も指すことができるという考えに基づき、単文のパズルを解決する。
- (5) (4)の解決法が認知言語学における「捉え方」概念と整合的であることを示す。
- (6) 固有名が既存言語の枠組を超え出るグローバルな言語要素であることを示す。

#### 4. 研究成果

- (1) 自然言語に見られる意味の柔軟性ないし文脈依存性が意味の合成性に対する脅威とならないことを示した。哲学および言語学では、意味の柔軟性が合成原理に対する脅威として捉えられることがあるが、これは意味の分節と合成を混同することにより生じる疑似問題にほかならない。分節とは複合表現との関係において単純表現を取り出す操作であり、合成とは単純表現の意味に基づいて複合表現の意味を計算する操作である。仮に合成原理が存在しなければ、表現の意味を、その構成要素の意味とそれらのあいだの結合様式から計算することができず、そのような言語においては、そもそも語を特定することさえ不可能になる。分節化された言語においては、合成原理は自動的に成り立つのであり、合成原理を守るための装置を組み立てる必要はまったくない。これは、固有名の意味の柔軟性ないし文脈依存性を示そうとする本研究の基本前提が妥当であることを示している。
- (2) 「言語は人間の世界認識の反映である」という認知言語学的な主張が引き起こす哲学的問題を明らかにした。この主張は外的世界と内的世界の二元論を前提としているが、認知言語学者が外的世界に関する事実と呼ぶものは、実際にはわれわれが解釈したかぎりでの世界の記述にすぎず、同じことを一元論のもとで述べなおすことができる。また、この主張を受け入れれば、言語間の変異はすべて話者の世界認識の違いによるという結論に至る。しかし、この結論は逆説的にも「話者の認識から独立した意味」という客観主義的意味観を帰結しうる。こうした問題を回避するためには、外的世界を言語が解釈するという二元論的図式ではなく、言語が端的に世界の相貌を立ち現すという一元論的図式を採用する必要がある。固有名の意味に使用者の関心が織り込まれているとする本研究の立場と整合的である。
- (3) 固有名に関する記述主義をサポートする証拠とみなされてきた非存在言明のパズルが、実は、記述主義と相反する立場である単称主義をサポートするものであることを示した。非存在言明を文法的注釈とみなす野矢茂樹の考え方と、「切り裂きジャック」のような記述名を「いずれ記述を介さずに対象を

指示できるようになることを期待された名前」とみなす F. Recanati の考え方を統合し、「PN は存在しない」が「『PN は Q だ』は単称命題ではない」(PN は任意の固有名、Q は任意の述語) を意味すると考えることで、単称主義のもとで非存在言明のパズルを解決した。ラッセルは「PN は存在しない」の PN の位置に入りうるものは固有名ではないと考えたが、実際には PN の位置に実際に入ったものだけが固有名としての資格を失う。個体志向性をもつが、固有名は固有名であり続けるのである。単称主義は一見したところ意味排除主義と整合しないように思われるが、これは誤解である。「固有名とは個体に対する特定の関心のあり方から生じる範疇である」とする意味排除主義においても、けっして「個体」が排除されるわけではない。個体の存在を前提としたうえで、その個体のある関心のもとに捉えることによって成立するのが固有名であり、この個体の存在前提が崩れたときに姿を現すのが非存在を表す文である。

- (4) 固有名が言語使用者の関心に応じていかなる対象も指すことができるという考えに基づき、単文のパズルを解決した。単文のパズルとは、(a)と(b)が真であるにもかかわらず(c)が偽となるパズルである。

- (a) スーパーマンはクラーク・ケントより高いビルを飛び越えることができる。
- (b) スーパーマン = クラーク・ケント
- (c) #スーパーマンはスーパーマンより高いビルを飛び越えることができる。

このパズルの有力な解決案として、意味論的には個体を指す固有名「スーパーマン」「クラーク・ケント」が、(a)においては「全体→部分」のメトニミーにより個体のある局面を指し、そのため同一個体を指す表現で置き換えることができないとするものがある。この解決案に関しては、(b)を知らない人でも(a)が理解できるという問題が指摘されている。「個体→個体の局面」というメトニミーシフトが可能であるためには、まず個体にアクセスしなければならないが、それができるためには(b)を知っている必要があるからである。この問題を解決するために、本研究は、固有名は個体を經由しなくても個体の局面を直接指示することができるとする固有名論を構築した。個体と個体の

局面の関係は先行研究の想定と反対であり、個体の局面のほうがより基本的な存在者である。固有名は言語使用者の関心に応じて個体の局面を(原理上は自由に)指すことができる。(3)で示した固有名の個体志向性により、局面を指す固有名はそのまま個体も指すことができる。通常、局面と個体は属性を共有しているため、たとえば「太郎」が局面の名前なのか個体の名前なのかを問うことは意味がない。たとえば、局面としての太郎が学生なら、個体としての太郎も学生である。このように、固有名の単称性は固有名の局面指示から自動的に導き出される。これが「2. 研究の目的(1)」で述べた「単称性 = 低次概念」という図式の内実である。ところが、場合によっては局面と個体の属性に齟齬が生じることがある。上の例(a)がこれに相当する。(b)を知っている人が(a)を個体に関する命題と解釈すると矛盾が生じる。そこで、局面としてのスーパーマンが「クラーク・ケントよりも高いビルを飛び越えることができる」という属性を持つのに対して、個体としてのスーパーマンはこの属性をもたないと考える必要がある。(b)を理解するということは、局面としてのスーパーマンと局面としてのクラーク・ケントの背後に、両者を束ねる個体が存在することを理解するというところにほかならない。この意味での個体は局面の属性から導き出せない属性をもっている。たとえば、(d)と(e)の述語は局面を理解しただけでは理解が不可能であり、その背後にある個体を想定する必要がある。

(d) クラーク・ケントはときどき高いビルを飛び越えることができる。

(e) スーパーマンはときどき新聞記者になる。

(b)の等号や(d)-(e)の述語を理解するためには、局面とは異なる存在者としての個体の理解が必要となる。これが「2. 研究の目的(2)」で述べた「単称性 = 高次概念」という図式の内実にはほかならない。

- (5) (4)で述べた単文のパズルの解決案を改良し、認知言語学の「捉え方」概念との整合性を確保した。(4)で述べた解決案によると、上の(b)を知っている人と知らない人はまったく同じように(a)を理解していることになる。しかし、両

者ではやはり(a)の理解のあり方に何らかの違いがあると考えられる。(a)は真理条件の部分とその「捉え方」の部分に分割することができる。

(d) (a)の真理条件: 「スーパーマン」が指す対象 a は「クラーク・ケント」が指す対象 b より高いビルを飛び越えることができる。

(e) (b)を知っている人の(a)の捉え方: a と b は同一個体 c の異なる局面(aspect)である。

(f) (b)を知らない人の(a)の捉え方: a と b は異なる個体である。

すなわち、(b)を知っている人も知らない人もまったく同じように(a)の真理条件(d)を理解することができる一方で、(a)の捉え方に違いがあるということである。(b)を知っている人は(4)で述べたとおりの理由で(a)から(c)を導くことはないが、(b)を知らない人は、まさに(b)を知らないために、(a)から(c)を導くことがない。この解決案は認知言語学にとって新たな知見をもたらす。これまで「発話の形式が異なれば、(真理条件が同じでも)発話主体による事態の捉え方が異なる」ということは広く受け入れられてきたが、この解決案が示すのは「発話の形式(および真理条件)が同じでも、発話主体による事態の捉え方は異なりうる」ということである。(b)を知っている人と知らない人では、(a)が表す事態(d)の捉え方が異なる。

- (6) 固有名のローカル性とグローバル性をともに考慮することにより、「固有名は言語システムの一部ではない」というテーゼ(T)を整合的に解釈することができることを示した。F. Recanati は、固有名とその指示対象との結びつきに関する知識が言語知識に含まれない(それゆえ固有名解釈に言語外の知識が関与するとする指標説が正当化される)ことの根拠として、その結びつきがローカルなものであるという事実をあげる。しかし、それだけでは固有名と専門用語が区別ができなくなる。実際には、固有名はローカル性とグローバル性を併せ持つという点で専門用語と異なる。たとえば Barack Obama という人物を知っている英語話者は英語話者の一部にすぎないが、この名前をこのままの形で理解することのできる話者の集合は既存のどの言語の話者の集合にも包含されない。これこそがテーゼ T の意味することにほかならない。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者  
には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

1. Sakai, Tomohiro. "What Do Proper Names Refer to?: The Simple Sentence Puzzle and Identity Statements", in: Otake M., Kurahashi S., Ota Y., Satoh K., Bekki D. (eds.) *New Frontiers in Artificial Intelligence. JSAI-isAI 2015. Lecture Notes in Computer Science*, vol 10091. Springer, Cham, 2017, pp. 15-26. DOI: 10.1007/978-3-319-50953-2\_2
2. Sakai, Tomohiro. "Realism and Anti-Realism of Polysemy", 『東京大学言語学論集 (TULIP)』第 37 号、2016 年 9 月、pp.239-259.  
<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/handle/2261/61255>
3. 酒井智宏 「非存在言明のパズルと単称命題」、『東京大学言語学論集 (TULIP)』第 36 号、2015 年 9 月、pp.131-151.  
<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/handle/2261/58876>
4. Sakai, Tomohiro. « La sémantique kaplanienne et la forme -tte en japonais », 『WASEDA RILAS JOURNAL』第 2 号、2014 年 10 月、pp.31-35.  
<https://www.waseda.jp/flas/rilas/news/2016/11/10/2199/>
5. 酒井智宏 「メンタル・スペース理論と認知言語学」、『東京大学言語学論集 (TULIP)』第 35 号、2014 年 9 月、pp.277-296.  
<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/handle/2261/56391>
6. Sakai, Tomohiro. "Truth-Conditional Pragmatics By François Recanati, Oxford University Press, Oxford, 2010, vii+324pp.", *English Linguistics* 31-1, 日本英語学会、2014 年 6 月、pp.365-375.
7. 酒井智宏 「認知言語学と哲学一言語は誰の何に対する認識の反映か」、『言語研究』第 144 号、日本言語学会。2013 年 9 月、pp.55-81、『英語学論説資料』第 47 号 (2013 年分)、第 4 分冊 (意味論・語彙・辞書)、2015 年 11 月、pp.315-328.  
[http://www.ls-japan.org/modules/documents/index.php?content\\_id=39](http://www.ls-japan.org/modules/documents/index.php?content_id=39)
8. Sakai, Tomohiro. « Le contextualisme est-il une menace pour la compositionnalité : Composition et articulation », 『東京大学言語学論集 (TULIP)』第 34 号、2013 年 9 月、pp. 131-142.  
<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/handle/2261/55575>

〔学会発表〕(計7件)

1. Sakai, Tomohiro. "Singular Thought in Non-Singular Propositions: From a Cognitive Linguistic Perspective", Australian Linguistic Society Conference 2016, Monash University, Melbourne (Australia), 9 December 2016.
2. Sakai, Tomohiro. "What Do Proper Names Refer to?: the simple sentence puzzle and identity statements", invited talk at Logic and Engineering of Natural Language Semantics 12 (LENLS 12), Keio University (Hiyoshi campus), Yokohama, Japan, November 17, 2015.
3. Sakai, Tomohiro. "Between Globalness and Localness: The Case of Proper Names in the Philosophy of Language", Translingua Conference 2015, Kazimierz Wielki University, Bydgoszcz (Poland), 24 September 2015.
4. Sakai, Tomohiro. "The Simple Sentence Puzzle about Proper Names and Identity Statements", Linguistics Seminar, The University of Queensland, Brisbane (Australia), 5 September 2014.
5. Sakai, Tomohiro. "Against the Optionality Criterion for Pragmatic Modulation", Research Seminar Series, Griffith University, Brisbane (Australia), 2 September 2014.
6. Sakai, Tomohiro. "Tautological and contradictory utterances of the form *X is (not) X* as language-shifters", Pragmatics meets Semantics Symposium, Griffith University, South Bank Campus, Brisbane (Australia), 16 November 2013.
7. Sakai, Tomohiro. "Where is the Linguistic System?: The case of Tautological Utterances of the Form *X is X*", 跡見学園女子大学科研費プロジェクト「日独『句例』対訳データベースの構築」(研究代表者: 阿部一哉、課題番号: 24720185) 主催 『Stefan Müller 教授ワークショップ・講演』、跡見学園女子大学文京キャンパス(東京)、2013 年 9 月 9 日.

〔図書〕(計0件)

○出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.tomohirosakai.com>

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

酒井 智宏 (Tomohiro Sakai)

早稲田大学・文学学院・准教授

研究者番号：00396839